

第 28 回平和祈念コンサート 戦時体験の講演

こむろながこ こむろながこ
【小室永子氏】 私は小室永子と申します。1929 年、昭和 4 年生まれで、あと 3 か月で 92 歳になります。

昭和 8 年頃から現在地に住んでおります。太平洋戦争の間も練馬を離れることなく、疎開もしないで、85 年間、現在にいたっております、練馬大好き人間です。

今回、練馬区から、平和祈念コンサートでお話をしてほしい、という依頼を受けまして、平和の大事さを身に染みて感じている私は、即座にお引き受けしました。

けれど、本当は、思い出したくない、戦争中の辛かった、苦しかったお話なのです。

皆さんは、平和ということを改めて考えてみたことはおありでしょうか。私は平和のありがたさ、平和であることの幸せを、しみじみ噛みしめております。

それでは、お話をさせていただきます。

「私が子供だった頃のお話」。

小学 2 年生の頃から、旗行列、ちょうちん行列がありました。日の丸の小旗を振りながら歩きます。途中でお菓子を貰うものですから、喜んで歩きました。今考えると、国民を統一するための政策だったように思います。

当時は、支那事変といいましたが、日中戦争で、日本は満州や中国へ進出していきました。それは、日本が食糧不足だったからだと思います。

当時、教室には、つぎのような文言を書いた紙が貼ってあって、毎朝、大きな声で唱えました。「天皇陛下は現人神なり。我等は天皇陛下の為に生まれ、我等

は天皇陛下の為に働き、我等は天皇陛下の為に死せん。」

友達と、「天皇陛下は神様だから、お便所に行かないよね。」「違うよ、天皇陛下だって人間だから、お便所に行くよ。」といった会話をしたことが思い出されます。

学校へ行くと、校門で一礼、校庭にある紫宸殿ししんでんの前でお辞儀をしてから教室に入りました。紫宸殿とは、天皇皇后のお写真が飾ってある小さな建物です。今思うと、天皇を中心に、戦争へ、戦争へ、と煽っていったのだと思います。

また、「紀元 2600 年のうた」というものがありました。「日本は 2600 年の歴史ある優秀な国なのだ」と教育され、私たちはそれを信じていました。歴代の天皇、万世一系の天皇と言いましたが、神武、綏靖すいせい、安寧あんねい、懿徳いとく、孝昭こうしょう、孝安こうあん…と覚えたものでした。

私が国民学校、今の小学校のことですが、6年生の12月8日のことです。ラジオから緊張したアナウンサーの声。「我が国は、アメリカと戦争状態に入れり。真珠湾を攻撃せり。」学校で、先生から戦争が始まったとのお話がありました。国民学校を卒業後、女学校へ入学しましたが、勉強ができたのはたったの一学期だけでした。敵国語は廃止です。英語の素敵な女の先生は、アメリカへ帰られました。私は、学徒動員で、志村の軍需工場へ行きました。

当時は、はっこういちう「八紘一宇」という言葉を使っていました。「全世界を一つの家にする」といった意味ですが、日本は、国土が狭く、食糧難だったため、国を大きくしたい、アジア全体を日本の支配下にしたいという野望があったのだと思います。

その当時歌われた歌は、「海行かば」。
海へ行ったら海の水になっても良い。山へ行ったら山の草になっても良い。天皇

陛下のためなら、一生を捧げても良いんだ、という歌です。また、出征兵士を送る歌を歌い、旗を振って見送りました。

街中では、憲兵が見張っていました。とても怖かったです。豊玉第二国民学校にいらっしゃった、自由主義を唱えていた先生の教室の周りでは、憲兵が見張りをしていて、と聞いたことがあります。

当時の服装は、国民服と言いました。男子はゲートルを巻いて、女子はもんぺ姿です。「ぜいたくは敵だ」と言われ、おしゃれはできませんでした。頭には防空頭巾をかぶりしました。爆弾から頭を守ろうというものです。でも、実際には、これをかぶっても役に立ちません。

金属はみな供出しました。橋の欄干、お寺の鐘、鍋、釜、金属のネックレスなど、みな兵器になるのです。それから、兵隊さんに慰問袋いもんぶくろを送るのですが、入れるものを買に行っても、デパートの売り場にあるガラスのケースの中は空っぽでした。それで、一生懸命お手紙や絵を描いて送ったものでした。

当時、練馬区の子どもたちは、群馬県の磯部というところへ集団で疎開しました。私の妹も、磯部へ行きました。

当時の標語は、「欲しがりません、勝つまでは」。食べ物は、野原の草の葉や、芋のつる。お米が無いので、ご飯粒は数えるほどの、おかゆやおじやを食べました。コロコロ太っていた私ですが、すっかりやせ細ってしまったため、母が「かわいそうに」と言ってやせ細った私の背中を撫でてくれたことが思い出されます。

空襲についてです。戦争が始まった頃は、「東京へは、敵の飛行機は絶対に来ない」と言われていました。しかし、次第に、東京の空にも、アメリカの飛行機が飛んでくるようになりました。はじめのうちは、警戒警報が「ウーウー」と鳴り、次に「ウーー」という空襲警報が鳴ります。

しかし、戦争が激しくなってくると、警戒警報ではなく、いきなり空襲警報が鳴ります。空襲警報が鳴ると、防空壕へ入ります。焼夷弾に直接当たらないようにするのが目的です。私の家の庭にも、防空壕を掘りました。爆弾が落ちてくると、大変です。目が飛び出す、耳が聞こえなくなる、息ができなくなるので、目や耳を抑えて、防空壕の中でがさがさ震えていました。

8月2日、空襲で、学徒動員で行っていた工場の敷地に爆弾が落ちて、地面に大きな穴があきました。私は見に行きましたが、本当にひどいものでした。

昭和20年3月9日の夜から、3月10日の明け方にかけてのこと。東京大空襲です。たった一晩で100万人の家が焼かれ、10万人の方が亡くなりました。私の父も、その一人です。

これは、江東区の学校に勤めていた先生から聞いたお話ですが、東京大空襲で、疎開をしていた子どもの家族が皆、亡くなってしまいました。先生は、子どもを川べりに連れて行って、そのことをお話ししようとしたところ、子どもが「先生、もうわかっているから。」と言ったそうです。私はこのお話を聞いて、涙が止まりませんでした。先生の気持ちや、たった一人取り残されてしまった子どもの気持ちを考えると、戦争は決してしてはいけないのだと、強く思います。

東京は130回を超える空襲にあい、約6割が廃墟となりました。日本全体では、被災した都市は212、焼けた家は310万戸、空襲で亡くなった方は38万人、そのうち民間人は30万人。戦地で戦った軍人は、156万人が亡くなったそうです。

そして8月15日、終戦を迎えました。皇居前広場では、泣き伏す人々、中には切腹した人もいたそうです。私はもう工場へ行く必要はなくなり、家で待機することとなりました。

戦後の復興はすさまじく、あんなに苦しんだ時間が嘘のようでした。日本人の底力、戦争から解放され、生きる喜びを知った力でしょうか。高層ビルの建設、

道路の整備。東京は、焼け跡から見事に立ち直っていきました。

そして今、日本は戦争のない平和な世の中です。

私は91歳。残り少ない人生を、有意義に明るく過ごしたいと思います。

戦時中の経験が、平和な時代を生きる皆様のお心に響いて、平和について改めて考えたり、話し合ったりしていただければと存じます。

この度は、お話を聞いていただきありがとうございました。

以上